

本稿は、昨年12月発行の「IC ニュース vol.31」に掲載した池上祥子さん執筆の原稿の再掲です。12月号では池上さんの原稿の末尾に、印刷段階で以前の別の原稿の一部が混入するという事態が生じ、筆者の池上さんにはご迷惑とご心配をおかけいたしました。事務局として誠に申し訳なく、筆者の池上さん及び読者の皆様に心からお詫び申し上げます。ここに池上さんのご承認を頂き、原稿を再掲いたします。事務局

九州の田舎で英語からもすっかり遠ざかり、IC精神を静かに顧みる時間もなかなか作らずに時が過ぎてきました。IC活動に参加の方々の道徳的な日々の積み上げを思うと、フォーラム会場まで足を運ぶ勇氣は全くありませんでした。しかしオンライン開催通知を頂いてその空気に触れてみようと思いました。参加して改めてチャレンジしていることは、静かな時間を持つことです。自分自身、周囲のことまで落ち着いて思うことができ、時の過ごし方が変わりつつあります。天然ボケと老いが重なり少々落ち込むこともある5人の孫を持つお婆ですが、これからは「親となった我子と孫に何を残すか!!」を念頭に静かな時間を大切に活かしていきたいです。

2021年9月のアンケート調査結果について 事務局

2021年9月に実施しましたアンケートにつき、集計結果を知りたいとの声が会員から寄せられました。遅ればせながらではありますが、ここに結果の一部を紹介いたします。(理事会では、2021/10に大隈副会長から報告済)。**【アンケートシートは右に掲載】**

本アンケートは、①②③は当協会の活動に顔出しされていない会員の中にも、機会があればボランティアとしての活動に参加頂ける方がいるのではないかと、④会員の中には、知られざるスキルをお持ちの方がいるのではないかと、⑤日常的にPCを使いながら、協会にはまだアドレスを登録していない方がいるのではないかと、といった問題意識の下に行われました。

まず、アンケートにご回答頂いた人数は、男性19名、女性23名(会員種別では正会員33名、賛助会員9名)の計42名でした。この時点での会員数は、正会員126名、賛助会員41名ですから約25%の方のご回答があったこととなります。年代別には、上から80代9名、70代12名、60代7名、50代6名、あとは40代3名、20代1名(無回答もあるので総数は42にならない)で、70代、80代で丁度50%、これに60代を加えると28名となり75%を占めます。

紙面の都合で、以下主な項目に絞って紹介します。
*語学スキルでは、英語で「日常生活レベル以上」との回答が21名あった。英語以外では、仏、西、葡、独、希、インドネシア語の記入があった。
*「ボランティアに参加する時間があるか」との問いに対しては、「時間あり」は4名であったが、「時間ができたら参加したい」が13名いた。「既に別の活動に参加」も9名おり、参加できない理由としては「体力・健康」「語学」等の面を挙げる方が目につく。

*任意回答項目だが、他の会員に伝えたい話、協会活動の支援となる特技を挙げてもらうと回答数は少ないものの、ICの海外体験(アジアプラト)と答えた方が複数いた。

「いずれ恩返ししたい」との大変有難い記述もあった。

*これも任意回答だが、当協会活動に対する希望・意見としては、「息長い活動を願う」、「メールマガジンを配信しては」、「関西方面で活動があると良いが」、「参加者にメリットを感じさせるコンテンツが必要」、「世界が良い方向に向かうような活動に参加したい」等があった。

なお、事務局として励みになったのは、Q2「協会とのつながり」で31名の方が「ICニュース」を挙げてくださったことでした。

限られた回答数なので、これで全体を推し量ることはできませんが、アンケート結果を新年度につなげるという意味では、「時間ができたら参加したい」という会員に活躍の場を提供すること、会員の特技・スキルに目を向けること等が課題になるかと思われます。

〔本アンケートの作成に当たっては、佐々木淳氏、牧三江子氏、中山啓介氏に多大なご尽力を頂きました。ここに記して感謝申し上げます。〕

今回のフォーラム参加で世界中から同時に互いの考えを共有できることは素晴らしいと改めてインターネットの偉大さを感じました。

莓ハウスの冬支度で大忙しの時、ハウスの上で泥はねが付いたズボンで作業しながら、ポケットの中のiPhoneから世界中を飛び回っての難民支援のリアルな話を聴けること、オンライン開催の有難さを痛感いたしました。

世界の国々、人々を近くに感じられるようになりました。ICの教えや人々との出会いに心から感謝し、「世界の平和は家庭から」を実践してまいります。

事務局はじめ通訳他関係の方々のご準備等誠に有難うございました。

アンケート調査へのご協力をお願い

国際IC日本協会も、1975年(昭和50年)、国際MRA日本協会として設立以来、間もなく50周年を迎えようとしています。半世紀の節目を迎えるにあたり、今一度、協会の活動を見直す機会としてアンケートを実施することとなりました。ご多忙とは存じますが、下記のアンケートにご協力いただけましたら幸いです。大変お手数をおかけしますが、9月末までに、回答は本紙に直接ご記入の上、同封の返信用封筒にて、ご返送ください。何卒ご協力よろしくお願い申し上げます。(各項目の□にレ点チェックを入れるか、必要事項をご記入下さい)

- 1:協会の会員になったきっかけは何ですか?
 行事等に参加して 英語等語学への興味
 社会貢献活動への興味 国際的活動への興味
 会員からの紹介 (ご紹介者名:)
 その他 ()

- 2:当協会とのつながりについて、あてはまるものをお選びください。(複数回答可)
 会費の支払い 行事等への参加 協会・行事の運営に協力
 ICニュースの閲覧 会員同士の交流 海外メンバーとの交流
 その他 ()

【任意回答】 行事等への参加が適わない理由がございましたら、ご記入ください。

- 3:普段の生活の中で、ボランティア活動等に参加する時間はございますか?
 時間があり、今後はICの活動にも参加したい。
 時間はあるが、すでに別の活動に参画している。
 今は時間が無いが、時間ができたら参加したいと思っている。
 そのような時間を取ることは難しい。
 その他 ()

裏面へ続く

- 4:【任意回答】 皆さまのご経験や知識の中から、他の会員にお伝えいただけるお話などお持ちですか? また、協会運営に対し、ご支援いただける特技(スキル等)があれば、お書きください。

- 5:【任意回答】 当協会の活動に対する、ご希望やご意見をお書きください。

最後に、ご回答いただける範囲で、下記の設問にご回答ください。
◆性別 男性 女性 その他・答えたくない
◆年代 10代 20代 30代 40代 50代 60代 70代 80代以上
◆語学スキル
英語 通訳レベル ビジネス会話レベル 日常生活レベル 単語レベル 不可
その他言語 () 通訳レベル ビジネス会話レベル 日常生活レベル 単語レベル
◆メールアドレス:
◆お名前: 正会員 賛助会員

お忙しいなか、アンケート調査にご協力いただき、有り難うございました。ご回答頂きました内容は、事務局で適切に保管し、協会と会員ご本人との連絡等、本来の目的のみに使用させていただきます。

アンケート担当: 副会長・専務理事 足立憲昭
公益社団法人 国際IC日本協会 事務局
東京都新宿区四谷4-28-20 パレ・エテルネル206号
Email: info@iofc.jp TEL: 03-6273-1428 Fax: 03-6273-1429

Initiatives of Change 一人ひとりのチャレンジで信頼を築く
IC NEWS Vol.32 ニュース
公益社団法人 国際IC日本協会
発行年月日 2022年1月11日
発行所 公益社団法人 国際IC日本協会
〒160-0004 東京都新宿区四谷4-28-20
パレ・エテルネル206号
TEL: 03-6273-1428 FAX 03-6273-1429
E-Mail: info@iofc.jp HP: http://iofc.jp
<International lofC> HP: www.iofc.org
頒価 1部 200円

いつまでも若々しく 会長 矢野 弘典

明けましてお芽出とうございます。今年もよろしくお祈りします。

人も組織も、常に若々しくありたいもの。新春にあたり、詩『青春』を紹介します。作者は米アラバマのS.ウルマン/岡田義夫訳です。

『青春』

青春とは人生のある期間を言うのではなく心の様相を言うのだ。

優れた創造力、逞しき意志、炎ゆる情熱、怯懦を却ける勇猛心、安易を振り捨てる冒険心、こう言う様相を青春と言うのだ。

年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いが来る。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。

苦闘や狐疑や不安、恐怖、失望、こう言うものこそ恰も長年月の如く人を老いさせ、精気ある魂をも芥に帰せしめてしまう。

年は70であろうと、16であろうと、その胸中に抱き得るものは何か。曰く、「驚異への愛慕心」、空にひらめく星辰、その輝きにも似たる事物や思想に対する欽仰、事に處する剛毅な挑戦、小児の如く、求めて止まぬ探求心、人生への歓喜と興味。

人は信念と共に若く 疑惑と共に老ゆる。

人は自信と共に若く 恐怖と共に老ゆる。

希望ある限り若く 失望と共に老い朽ちる。

大地より、神より、人より、美と喜び、勇氣と壮大、偉力との靈感を受ける限り人の若さは失われぬ。これらの靈感が絶え、悲嘆の白雪が人の心の奥まで蔽いつくし、皮肉の厚氷がこれを固くとぎすに至れば、この時にこそ人は全く老いて神の憐みを乞うる他はなくなる。

以上は、宮澤次郎「感動の詩賦『青春』～心の地下水を汲みあげる」(竹井出版、昭和63年刊)からの引用です。リーダーズダイジェスト英語版(昭和20年12月号)に掲載されたものが原文です。他にも訳はありますが、岡田氏の名訳は最も格調が高く、長年にわたり愛誦され、広く多くの人々を鼓舞してきました。



紅顔の少年少女がいつの間にか老境を迎えるように、どの組織も年とともに老化マンネリ化します。どうすれば、常に澁刺とした営みが続けられるか。この課題を解決するのは、家庭でも団体でも、一人ひとりの若々しさにかかっています。

IC(MRA:道徳再武装)について申せば、創始者F.ブクマン博士が提唱した原点に立ち返り、異なる環境下にある現代に如何にそれを活かすかです。原則は堅持しつつ、行動は臨機応変で行くこと。物質主義、金権主義、覇権主義が蔓延している今日ほど、MRAの精神が必要とされている時代はないと私は思います。

正月をお屠蘇で祝いながら、私は『青春』の詩に啓発され、同時に明治維新の精神的支柱であった碩学佐藤一齊の『言志四録』を開き、次の一節に励まされました。

少にして学べば すなわち壯にして為す有り
壯にして学べば すなわち老いて衰えず
老いて学べば すなわち死して朽ちず

歩みは遅くとも、いつまでも精神の錬磨を怠らず、心のバッテリーを充電し、次の行動に繋げよと言うのです。

皆さま、新年を迎えてお元気にお過ごしでしょうか。昨年、心に残った出来事を共有したいと思います。

私は昨年 11 月に、東京国立博物館(上野)で開催された伝教大師 1200 年大遠忌記念特別展「最澄と天台宗のすべてに出かけました。雨の中、上野駅から 800m の入口と更に館内を雨に降られながら歩いて、東京国立博物館平成館まで辿り着きました。会場では、音声ガイドを聴きながら、伝教大師(最澄)、唐から経典を持ち帰り天台密教を伝えた慈覚大師(円仁)や智証大師(円珍)の像に参拝し、さらに、織田信長による「比叡山焼き討ち事件」の後の復興に、重要な役割を果たした慈眼大師(天海)の像などを拝観しました。慈眼大師は、108 歳(1536~1643)まで生きた間に、徳川家康、秀忠、家光三代から信任を得て、東照大権現として神となった徳川家康を祀る東照宮や輪王寺を日光山に整備し、江戸城の鬼門に当たる江戸忍岡(上野)に「東の比叡山」東叡山寛永寺を開き関東天台宗の総本山とされました。鬼門とは、「鬼(邪気)の出入りする方角」を意味しています。

今回の展示は、全国の天台宗寺院(延暦寺、四天王寺、園城寺、長谷寺、輪王寺、浅草寺、寛永寺、深大寺)から、「秘仏」が集められていました。沢山のお祈りが一度にでき良かったと心から感謝しました。

話は変わりますが、作家で天台僧の瀬戸内寂聴さんが 99 歳で亡くなった記事が「(広報天台)天台ジャーナル」第 225 号に、天台宗杉谷顧問の追悼文が掲載されていました。その中で、当協会が大切にしている親子間の葛藤について触れられていましたのでご紹介いたします。(以下原文のまま引用)

僧侶であり作家であった彼女の活動範囲は幅広く、従来の僧侶像や作家像では捉え切れない魅力があった。それは現代という時代が生み出す、人々の悩みや苦しみに応えたり、寄り添う力があったということだ。寂聴さんといえば

まず得度式を思い出す。1973 年 11 月 51 歳のことであった、自慢の豊かな黒髪を剃り落とす間、小一時間にわたる天台声明の調べが晩秋の陸奥中尊寺に尾を引くように響きわたっていた。それまでの瀬戸内晴美という流行作家が、やがて瀬戸内寂聴となり、晴美という名前が忘れられるほどの、寂聴というお坊さんの作家に変身していく。三歳の子供を置いて、家を飛び出した彼女を、そのことが原罪のごとく苦しめたことは、想像に難くない。人間の業の深さを抉り出し小説に書き、その意味を問い続けた。「私には書き続ける責任がある。幸せになっちゃいけない。倒れるまでペンを握り続ける。」ともいった。しかし、その後娘さんと再会するという奇蹟が訪れ、娘さんが「生みの親と育ての親が穏やかに話をする様子を見て、私は幸せを感じた。」と、寂聴さんの枕辺で静かに語るのを聴いて、寂聴さんは大往生できたなど、しみじみ感じた。火のような情熱を持ち続け、最期まで華やかに光り輝く生涯であった。その反面で自分を偽らない厳しさを貫き通した僧侶であった。



私は大阪市の生まれで、祖父が天台宗であり、父親が早くに他界したため、幼い時から祖父が私を連れて参拝しました。現在の私は、天台宗出版室が発行する「(広報天台)天台ジャーナル」に目を通しながら、時折、お経をあげたり、近くの神社・寺院へ参拝しています。また、審査で地方に出たときは、出来る限り、その土地の神社・寺院へ参拝も行っています。さて、天台宗の教えに「忘己利他(もうこりた)」があります、私は残った人生を「己を忘れて、他のために」を目標に、更なる勉強と、精神面を磨く努力を続けながら、今年も一年を過ごしたいと思っています。

オーロラを目指して 木村 陸

時代はコロナに支配され私たちの生活は大きく変化しました。時代は変わる。私たちはこの地球という自然あふれる豪華客船に乗船しています。長旅ですから時折事故はつきものです。尚更見えぬ旅路を進むこの船に乗るからには、変化に対応しなければなりません。

今年の IC フォーラムのテーマは「意識の改革」でした。寺島実郎氏のご講演から始まり、各界でご活躍されている方のお話を拝聴し、私たちが何をしなければならないのかが痛感された方も多くいらっしゃると思います。そして、体験型シェアリングや静かな時間を通じて、自身が自分や家族、地域、日本、世界に対し何が出来るかを考える機会もありました。皆さんが考えたこと自体が意識の改革です。現状を把握できなければ改善もできません。私自身、3 月にソフトテニス振興事業を行う NPO 法人を設立しました。フォーラム後は約 200 人規模の大会や講習会を主催するなど、スポーツマンシップを通じて世界の平和や明るい未来になるよう行動しているところです。皆さんが気づかれた意識改革のうち、どれくらい実行されましたか。私

たちが小さな積み重ねをすることで、大きな変化をもたらします。新年にあたり、この時期に見つめ直してはいかがでしょうか。

最後に皆さんに 1 つご質問です。ご自宅の階段或いは職場の階段は全部で何段ありますか。おそらく即答できなかった方が多いと思います。自宅においては毎日欠かさず上り下りをされていることと思います。即答できないのは、そこに意識がないからです。裏を返せば、意識すれば分かることなのです。意識をするということはそれほど難しいのかもしれませんが。意識すれば変化が起きる。これからも意識の改革を行い、豪華客船の次の目的地が、オーロラのような明るい素晴らしい場所になるように是非行動に移して行きましょう。私も乗組員の一人として尽力いたします。



謹賀新年。皆さまにはお健やかに新年を迎えられたことと思います。さて、日本・世界の現状を直視すれば、人としての尊厳を蔑ろにされ、目を塞ぎたくないような命の安全も脅かされた理不尽な人生を強いられている人々の現実があり、いま、同じ地球上で生かされている者として心が痛みます。私たち一人ひとりが「それはおかしい。」と声を上げることがどれほど大切なことか、元国際 IC 日本協会会長の故相馬雪香氏は、常に「日本は人の心の痛みをわかる国になってほしい。」と願い、国内外の人々との信頼と友情を築くためにご尽力された生き方は、国内外の多くの人々の心の中にいまも生きています。

残念なことに世界から見た日本社会は、ますます信頼を失っている現状もあり、人権に関しては、国連人権理事会から日本は 3 度の勧告を受けています。国際 IC 日本協会では、世界各地の IC のネットワークから、それぞれの与えられた環境で、より良い社会改善に尽くされている方々の声を、フォーラム、学校訪問、日中韓フォーラム他、各企画からお届けしてきました。それらのメッセージを受け、IC にかかわる我々一人ひとりが、自分の与えられた環境の中で、自分はどうか生きていくのか? 日本からの世界へのメッセージがいつも問われています。明日、何が起きるのか誰もわかりません。病、事故、まして地震国の島国日本で、原発事故が一度起きれば、国内は勿論、海洋・大気によって、命の連鎖を封じる世界破壊の驚異のひとつとなっています。弱者に寄り添う方向がますます薄れる日本社会の現状で、我々一人ひとり、次世代にどんな日本を託して行こうとしているのでしょうか。世間はなんとでも言えます。その中で何が確かなことなのか、日々自分の心を静め、心の掃除をし、新しい閃きを得て、行動に移す一歩こそ

が、確実に次の歩みにつながります。みなさまと共に、生かされている間、次世代のために全力で尽くす所存でございます。

ご存知の方も多くいらっしゃると思います。今一度ドイツ神学者マルティン・ニーメラー氏の言葉を引用致します。(1982-1984 年。最初はナチス支持者だったが、後に教会のナチ化に反対して、1937-1945 年まで強制収容所に収容され、辛うじて生還した) 彼らが最初共産主義者を攻撃した時、私は声を上げなかった(なぜなら)私は共産主義者ではなかったから 社会民主主義者が牢獄に入れられたとき、私は声を上げなかった(なぜなら)私は社会民主主義者でなかったから 彼らが労働組合員たちを攻撃したとき、私は声を上げなかった(なぜなら)私は労働組合員ではなかったから 彼らがユダヤ人たちを連れて行ったとき、私は声を上げなかった(なぜなら)私はユダヤ人などではなかったから、そして、彼らが私を攻撃したとき私のために声を上げるものは、誰ひとり残っていなかった



前列左が筆者

2022 年の皆さまの新しい歩みの上に、大いなる心の祝福とお支えが豊かに在りますよう心よりお祈り申し上げます。敬意と感謝を込めて。

論語塾に参加して 村田 順子

「古典の森に入って散歩する、とってください。」最初に矢野会長が言われた言葉でした。

なんて素敵な表現だろう。国際 IC の活動にも全く参加できず、最近福岡にも行けなくなり、そろそろきちんと辞めなくてはと思い始めた時に、論語塾が始まりました。

どんなに嬉しかったかわかりません。何の活動もしていないのに申し訳ない、と思いながらも、死ぬまでに論語を読破したいという思いで参加させていただきました。

今回の投稿も以前であれば辞退させていただくところでしたが、ご連絡をいただいた時に丁度読んでいた文章が論語の中の陽貨等十七でした。その中に君子学道則愛人 小人学道則易使也 「君子(為政者)が道(儀礼と雅楽)を学ぶと人を愛するようになり、小人(被治者)が道を学ぶと使いやすくなる。」という一説があり、解釈的には違ってもいいかもしれませんが、学

ばせていただけてせめて小人とし使いやすい(頼られる)存在になりたいと思いました。

会長は「200 回読みました。」と言われました。人にものを教えるとはそういう事かと教えられました。土光会長のお話や実体験など生きた論語を学ばせていただいております。

国際 IC と論語、自分自身を変えるという事は相手へのまごころと思いやりを貫くことではないかと気が付かせていただきました。

「論語」の門戸を広げてくださった矢野会長、国際 IC の皆様、そして、国際 IC とのご縁を下さった亡き井原先生にこころより感謝申し上げます。

